

エゾタヌキの生活と森林

宮 木 雅 美

は じ め に

「狸寝入り」、「狸親父」、「狸の腹鼓」、「狸の八畳敷」など、タヌキは、昔から、どこか愛敬のある動物として人々に親しまれてきました。しかし、身近な動物でありながら人の目にふれる機会も少ないため、その生態はあまり良くわかっていません（写真 - 1）。

タヌキは、東アジアを原産地とし、1属1種のきわめて原始的なイヌ科動物とされています。北海道にすむエゾタヌキは、その1亜種で、ホンドタヌキより大きく、毛も長いのが特徴です。

当场では、森林とそこにすむ野生動物を適切に管理し、同時に、森林公園などでの自然教育に役立てるため、野生動物の基礎的な調査を進めてきました。エゾタヌキについても、ありふれた森の動物の代表として、森林との関わりやその生活を調べてきました。ここではエゾタヌキが、森林のどのような場所をすみかとし、どのような食物をとっているのかを紹介し、鳥や獣の住みよい環境をつくるにはどうすればよいか、野生動物の豊かな森づくりについて考えてみたいと思います。



写真 - 1 11 月のエゾタヌキ

調査地と調査方法

調査は、美唄市光珠内にある当场実験林とその周辺で行いました。実験林内は、カラマツやトドマツなどの人工造林地が多く、沢部には広葉樹の二次林が残っています。実験林の周辺は、おもに広葉樹の二次林で、近年はあまり人が入らず、放置された状態になっています。

野生のタヌキは直接観察することが難しいので、おもにラジオテレメトリー（無線遠隔探査法）を用いて行動を追跡しました。

まず、わなでタヌキを生け捕りにし、首輪型の電波発信機をつけて、元の場所に放します（写真 - 2）。発信機の重さは約 120g、体重の 3%前後で、行動には玄障を及ぼさない重さと考えられています。発信機は、特定周波数のパルス信号を、約 2 年間発信し続けます。発信個体の位置は、2 地点で調べた発信方向を地図上に落とし、その 2 直線の交点から求めます（写真 - 3）。また、体を動かしているか、静止しているかは、受信電波の強さの振れでわかります。つがいの両個体に発信機をつければ、互いにどのように行動域内を活動しているかを知ることができるわけです。発信機をつけた個体は、3 年間で 14 頭になりました。



写真 - 2 発信機をつけたエゾタヌキ



写真 - 3 タヌキのいる方向を調べる

タヌキが何を食べているかは、フンの内容物を調べることによってわかります。タヌキは同じ場所にフンをする習性があります。これを「タメフン」といいます（写真 - 4）。

ある時、林道の上に山のようになったタメフンが、クマのものとまちがわれ、入山者をあわてさせたことがありました。タメフンは、1カ所に古いフンと新しいフンとが含まれており、フンの直径も小さいので、クマのものと区別することができます。また、タヌキのフンには独特の臭いがあるので、新しいものなら1固のフンでも、臭いによってほかのものと区別することができます。

タメフンは、タヌキが臭いによって互いの存在を知らせあう、いわば情報交換の場として利用されていると考えられています。このタメフンから定期的にフンを採集すれば、食物の種類や相対的な量、季節的な変化などの情報が、私たちも収集できるわけです。



写真 - 4 エゾタヌキのタメフン

どのような場所をすみか としているか

エゾタヌキは、つがいを中心とした群れや単独の個体で、きまった行動域をもって生活をしています。行動域の広さは80ha前後あります。親から分散した当歳個体を除くと、群れまたは単独個体が利用する地域は、ほとんど重なりあうことはありません（図 - 1）。

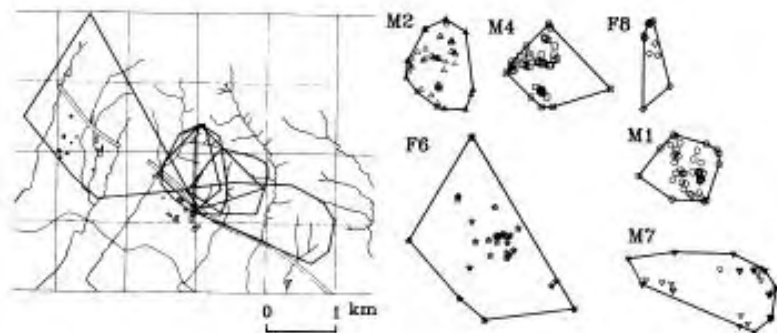


図 - 1 各個体の行動域（10月～11月）

行動域内の調査位置を右にしめす。1つの群れ（F8, M2およびM4）と3頭の単独個体（F6, M1およびM7）の利用地域は、ほとんど重なっていない。

行動域には、広葉樹の天然林だけでなく、針葉樹の人工林も含まれますが、人工林の中にいることは少なく、活動場所はおもに天然林内であるといえます。また林道は、タヌキの移動ルートとしても、食物を得る場所としても重要です。

森林の利用の仕方を大きく分けると、休息や睡眠をしたり、出産、子育てをするための場所（泊まり場）と、食物をとるための場所（えさ場）とに分けることができます。

泊まり場の特徴について、季節を追ってみていくと次のようになります。

冬の泊まり場は、樹洞や土の穴、雪の下の空洞などが利用されます。樹洞は、カツラなど大きな木やその切り株にできた穴で、沢部に多いのですが、斜面の水はけのよい場所にある樹洞が好まれるようです（写真 - 5）。土の穴は、タヌキが自分で掘ったのではなく、キツネが子育て後、放棄した穴でした。根元曲がりの木やハイヌガヤなどの上に雪が覆いかぶさってきた空洞は、若い個体によく利用されます。その年に生まれた個体は、何度も場所を変えて雪の下の空洞を利用していました。この空洞は形が変わりやすいので、越冬場所としては良い場所ではないようです。



写真 - 5 越冬，子育てをしていたカツラの樹洞

6～7月の出産，子育てには、穴が深くて安全な樹洞や土穴が利用されます。このような場所が、行動域の中に数カ所あります。タヌキはたいへんデリケートな動物で、巣穴の近くに人が立ち入ったりすると、翌日には別の穴に移っていることがよくありました。

夏には、樹洞や土の穴には入らず、多くは地面の上で休んでいます。風通しが良く、しかも外からは見通しが悪い場所で休んでいるので、近づいてもすぐに気づかれ、静かに逃げられてしまいます。

秋には、タヌキの活動が活発になり、日中もよく動き回ります。サルナシ（コクワ）など、えさのある場所の近くで休息することが多くなります。

どのような食物をとっているか

エゾタヌキは、冬の間は食物をほとんどとりません。積雪が30cmにもなると、歩くのが困難になり、樹洞などに入って1日の大半をその中で過ごすようになります。寒いときには、数日穴の中にこもっていることもあります。この時期のフンは、小さくて固く、繊維質のものが含まれているだけです。木の芽などをわずかに食べていると思われます。

春になると、活動を始めたカエルが主な食物となります。活動の場も、沢筋や池の近くが多くなります。そのほかに昆虫類やカタツムリなども食べます。フンからはわからないのですが、タヌキが活動していた林では、夜にミミズがよく出ていたので、ミミズもたくさん食べていると思われます。

夏は、食事のメニューが最も豊かな季節です。昆虫類、カエル、ヘビ、ザリガニ、林床の果実類などを食べています。昆虫類の中では、コガネムシやバッタの類のほかに、クワガタムシをたくさん食べます。タヌキは、地表付近を徘徊する小動物のなかでも、比較的大きなものを食べているといえます。しかし、ネズミ類がフンの中から出てくるのはきわめてまれで、タヌキはネズミのようなすばしこい動物をとるのは苦手なようです。

秋になると、タヌキはつるの多い沢の斜面や上部で、集中的に活動するようになります。タヌキは、サルナシの実を、8月に固いまま落ちたものから、11月に発酵して雪の中に落ちたものまで食べます。秋のタメフンは、ほとんどがサルナシの実で占められています。ヤマブドウなどの実も含まれていることがありますが、わずかです。調査地ではサルナシが多いことと、サルナシの実は糖分が多く、タヌキに好まれるためと考えられます。

エゾタヌキの体重は、秋に急速に増加します。そして翌年の4月には、秋の体重のおよそ半分になってしまいます。冬越しのためのエネルギーのほとんどを、サルナシの実でまかなっているのです。

野生動物の豊かな森づくり

以上から、エゾタヌキの生息に適した環境は、樹洞のある木が残され、安全な繁みがあり、昆虫などの小動物や、木の実が豊富な森林であることがわかります。このような森林は、他の哺乳類や鳥類にとっても、住みやすい環境といえるでしょう。

では、野生動物の豊かな森をつくるには、どうすればよいでしょうか。山を放置して、いわゆる「ぼさ山」にしておけばよいのでしょうか。

原生保全地域などを除いて、一般の森林では、用材生産や水源かん養、保健休養など、多面的な森林の利用が求められます。多面的な利用に応えることのできる価値の高い森林をつくるには、積極的に手を加えていくことが必要です。

たとえば、人工林で長伐期大径材の生産をめざす林では、立木零度が低くなるので、下草やかん木がたくさん茂ってきます。そこでは、植えた木の障害とならないように、野生動物の食物となる木や草を残したり、安心して休める茂みをつくったりすることができます。

また、人工林の多い所でも、沢筋や尾根には保護帯として広葉樹林が残されています。本来は、風や霜を防ぐために設けられたものですが、野生動物の食物やすみかを提供する場としても、それらの通路としても重要です。林縁部では、サルナシやヤマブドウ、イチゴ類など、実のなるツル類やかん木を育成し、場合によっては自生の、実のなる木を植えることも必要です。保護帯の中では、ミズナラなど実のなる高木を適度に間伐し、1本1本の成長を高めて、たくさん実がなるようにします。これは風に強い木をつくることにもつながります。

天然林の腐朽した大径木は、経済的には価値の低いものですが、樹洞性の鳥類や哺乳類にはたいへん価値の高いものです。これらの木は、ha当たりの本数を決めて残したり、伐採する場合は、伐採高を高くすることが必要です。

野生動物の豊かな森づくりは、今までの林業技術を基礎にした、新しい試験研究の分野です。動物が必要とする環境要素をくわしく調べ、果実や種子の生産性を高めるための保育法や、森林のタイプに応じた野生動物のための樹木の管理法などを、今後明らかにしていきたいと思っています。

お わ り に

森林は、野生動物を単に養っているだけではなく、動物による花粉媒介や種子の散布、食葉性昆虫の捕食などにみられるように、野生動物からも恵みを受けています。植物も動物も、そこに住む生物のすべてが、網の目のように関わりあって進化し、生活してきたといえます。

一方、人間の社会では、アウトドアライフ、バードウォッチング、森林浴などの言葉に表されるように、自然を、精神的な豊かさや健康的な活動の場として利用しようという気運が高まっています。その要望にこたえるために、「アメニティー豊かな森林づくり」が模索され、各地で森林公園などがつくられるようになりました。「アメニティー」(快適性)という言葉の本来の意味にあるように、単に安楽で安全な環境だけでなく、人間を鼓舞させ、躍動させるような刺激的な環境も、自然を求める人々には必要であると考えられます。

野生動物の生活や、森の生物の関わりあいに接し、自然の豊かさと厳しさを肌で体験することができる森林は、自然教育の場としても、精神的な豊かさを求める場としても、価値の高い森林といえるでしょう。

エゾタヌキにとっても、人間にとっても、「アメニティー」豊かな森林が望まれています。

(育 種 科)